

複製への抵抗：Bartleby と貨幣，そして解釈

秋 元 孝 文

Bartleby の決まり文句に勝つ方法は、ない。不定詞の to のあとを空白にし¹⁾、なにものでも代入可能にしたこの「受動的な抵抗 (passive resistance 23)」はいかなる呼びかけからも身かわし、肯定でも否定でもないそのもの言いは問いかけに「応え」つつ何も「答え」ることはない。法律家である語り手は、バートルビーの行動に“reason” (32) を求め“reasonable” (30) になってくれと乞うが、この言葉に勝つためには論理 (reason) の外側に出て暴力に訴えるしかない。論理の内側にとどまる限り勝ち目はないのである。ひとつだけこの言葉に負けない方法があるとするならば、それはそもそも問いかけないこと、to のあとに省略される亡霊のような動詞を与えないことだ。

Gilles Deleuze は *Essays: Critical and Clinical* においてバートルビーの決まり文句を “not a will to nothingness, but the growth of a nothingness of the will” だと評している。(71) 「無への意志ではなく、意志の無の増殖」だと。無への意志とはいわばニヒリズムであり、すべてを破壊し無にしたいという「意志」である²⁾。一方で「意志の無」とは意志を持つことじたいへの抵抗、意志とそれへの応答に基づいたコミュニケーションの仕組みじたいへの抵抗である。バートルビーは意志を持たない。持ちたくない。いや、持ちたくないという意志さえ持たずにすませられればありがたいのですが。意志を持つよう要求する世界に対する彼の盾こそが “I would prefer not to” なのである。

ところが、そんなバートルビーが作中で唯一、決まり文句の定型を外してまで意志を表明してしまう個所がある。事務所の連中が彼の “prefer” をコピーし始める場面である。書写人たちがバートルビーの奇妙な “prefer” を真似するようになったのに気づき、語り手はターキーに指摘する。

“So you have got the word too,” said I, slightly excited.

“With submission, what word, sir,” asked Turkey, respectfully crowding himself into the contracted

space behind the screen, and by so doing, making me jostle the scrivener. “What word, sir?”

“I would prefer to be left alone here,” said Bartleby, as if offended at being mobbed in his privacy. (31)

ターキーが “prefer” を使っていると指摘されても気付かない、というある種コミカルなドタバタを前にして、普段は “pale” で “cadaverous” なはずのバートルビーは、「あたかも怒ったかのように (“as if offended”)」 “prefer” を用いて自分の「意志」を表明する。「ひとりにしていただけるとありがたいのですが」。ここでの “prefer” はそれまでの定型を離れ、返答ではなく発信であるために to 以下を相手にゆだねて空白にすることができない。バートルビーが「意志の無」の穴蔵から這い出した瞬間である。

しかし、なぜ彼はここで「怒ったかのように」意志を表明したのだろうか？

本論は Herman Melville の “Bartleby, the Scrivener: a Story of Wall-Street” (1853, 以下 “Bartleby”) について、この場面を起点に、バートルビーの中に複製への抵抗を読み取り、それを貨幣経済、そして作品の解釈行為との関連から読み解こうという試みである³⁾。

1. 経済のロジックと決まり文句

バートルビーが当初は「むさぼり食うように」しかし「生氣なく」「機械的に」行っていた書写をやめる前、語り手は書類の読み合わせを三度拒絶される。(20-25) その都度その思いがけない抵抗にあたって理性 (reason) の世界の住人である語り手はバートルビーの態度を消化できずに混乱してしまうのだが、深く考えることはしない。最初の二回は「仕事が急を要する」ため、そして三度目に到っては「食事のため」にこの問題を後回しにしてしまう。彼はみずからの語りにおいて、バートルビーの奇妙な行動を寛容に解釈しようというそぶりを見せる。バートルビーには悪意はなく、自分は彼の行動を大目に見てやろうと、さりげなく

「私ほど寛容ではない」架空の雇用主を仮定 (assume) し、彼との比較によって自らの寛容さを強調して見せる。(23) ところがそのあとの部分では、正直さゆえか、ついあふれ出た本音なのかは不明だが、バートルビーを容赦することは決して自分にとって不利益ではないことを吐露してしまう。

Yes. Here I can *cheaply purchase* a delicious self-approval. To befriend Bartleby; to humor him in his strange wilfulness, will *cost* me little or nothing, while I lay up in my soul what will eventually prove a sweet morsel for my conscience. (23-4 イタリック引用者)

バートルビーを保護することによって、語り手は自分の寛容さに酔いしれ自己礼賛を手に入れることができると告白している。ここで語り手が“cheaply,” “purchase,” “cost”といった商取引の言葉を使っているのは印象的である。商取引とは商品と対価の交換の上に成り立つのであり、そこでの両者は同じ交換価値を持つと前提される。だから語り手はバートルビーを保護することによってならぬ不利益をこうむってはいないし、その寛容さはむしろ納得づくで支払われる「対価」である。彼が架空の雇用主と自らを比較して自慢してみせる「寛容さ」とは、本来「慈善」という無償の行為と結び付くはずであるが、ここでは商取引の道具とされているため、もはや「慈善」ではない。語り手はかようにシビアに商取引の原則を崩さず、表面上は慈善を謳ってはいても実際には自分の利益を秤にかけて決して損失は出さない。

バートルビーが書きさえやめてただ事務所に存在するだけになったとき、語り手が最終的に事務所の移転を決意した理由を思い出そう。それは、事務所に居座る不気味なバートルビーに関して仕事仲間たちの間で噂が広まったためではなかったか？そして、移転しても事務所に居つくバートルビーを説得に向かったのも、新聞沙汰にするぞと脅されたからではなかったか。語り手は表面上は慈悲の精神を強調しているが、実際は一貫して自分の損得を行動原理にしており、損害を被らずに「自己礼賛」を手に入れられるうちはバートルビーを容赦するが、損害が発生しそうになると慈悲の精神はどこかへ追いやられ、バートルビーの排除を実行に移すのだ。

語り手の行動原理が経済的なロジックに裏打ちされているという事実は冒頭の自己紹介の部分でも明らか

にされている。彼は「金持ちの債権、抵当、権利証書」を扱うことで満足している男であり、当時のアメリカでもっとも金持だった男 John Jacob Astor の仕事を請け負っていたことを自慢に思っている。(14) 毛皮の商売で身を起こしたのち、所有した土地の借地権を売ることによって莫大な財産を築いたこのアメリカ初の百万長者には、アメリカにおける資本主義の黎明が見て取れる⁴⁾。土地を「売る」行為は貨幣と商品の単純な交換であるが、土地を「貸す」場合、商品として取引されるのは権利だけで、元手である土地自体は所有者の手に残ったままである。このようすには、資本が富を自動的に増殖していくという、かつてフランクリンが見抜いた貨幣経済の原理が見られる。そして語り手は、この貨幣経済の勃興を象徴するアスターへの偏愛を露わにする。彼はその名前を口に出して味わうことの喜びを表明し、それは「金塊 (bullion) のような音がする」と言い、金に対するフェティシズムを隠そうともしない。(14)

語り手はトリニティ・チャーチに通い、バートルビーの死に際しても聖書のヨブ記から引用して見せる敬虔なキリスト教徒であるが、その敬虔さとひたすらに貨幣の獲得を目指す彼の職業態度が矛盾しないことは、マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で明らかにした考えで説明できるだろう。本来禁欲を説くプロテスタンティズムは一見資本主義的利益追求とは相容れないように見えるが、実はプロテスタントは、神の求める行為として「天職」に励み、そして禁欲的なために獲得した貨幣を浪費しないため、結果的に、貨幣はひたすら増え、貨幣を獲得することが自己目的化していく。晩年「もし自分が今知っていることと今投資できる金を持って人生をやり直せるなら、マンハッタン土地をすべて買い占めるだろう」と語り、*New York Herald* に“self-invented money making machine” (Claudia Durst Johnson 33) と揶揄されたアスターは、ウェーバーが引用して見せたフランクリン的な繁殖する貨幣の性質を見抜き、ひたすら貨幣の獲得を追求した。語り手が心酔しているアスターとはそのような人物である。

こうした資本主義の精神に満ちた世界で、バートルビーはいかにふるまうのか。彼は語り手とは対照的に資本主義の精神とは無縁である。貨幣獲得はバートルビーの行動の目的にはならない。貨幣を獲得しないわけではないが、たとえば事務所から去るように命じた語り手から渡された手切れ金に手をつけないことに顕著にみられるように、貨幣の獲得量を増やすことは目

的とはならない。(35) その一方でバートルビーは貧困にあるわけでもない。事務所に住み着いてはいるものの身なりはきちんとし、机の引き出しの奥にはパンダナに包んだいくばくかの貯金さえある。(28) それは金額としては少ないかもしれないが、そもそも消費をしないバートルビーにとって所持する貨幣の量が多かろうが少なかろうが問題ではない。彼の持つごく微少な欲求さえ満たすことができれば充分なのであり、消費が限りなくゼロに近い以上、多い少ないといった量的な尺度じたいがここでは無意味である。多寡で測れるものさしの埒外にバートルビーの財政はある。だからこそ語り手の経済のロジックとバートルビーは相容れない。

そしてバートルビーが繰り返す決まり文句 “I would prefer not to” も同様に、Yes と No を両端としたものさしの埒外にある。肯定でも否定でもなく、かといって単純にその両極を結ぶ線分のどこかに特定できるような「程度」を表してもいない。バートルビーはその決まり文句をもって、線分的ものさしに基づいた語り手の経済のロジックに抵抗する。

2. 複製と貨幣

経済のロジックに従順な語り手とそのロジックに抵抗するバートルビーという対立を見た上で冒頭の場面に戻ってみたい。バートルビーがその返答のみによって成立していた「意志の無」の世界を抜け出して自らの意志を発信したのは、テキストの表面上はそのプライバシーを邪魔されたからであるが、この場面で彼のおはこの “prefer” がほかの人々によって濫用されていることを考えれば、あたかも彼の憤りは自分のおこを奪われたことへの不満を表明しているようにも見える。Weinstock が指摘しているように、この場面では「バートルビーがコピーを拒む一方で他の者たちは彼をコピーしている」(34)。そしてバートルビーは、本物ではないまがい物、コピーが蔓延していることに憤っているかのようである。“prefer” は私の言葉です、勝手にコピーしないでください、と。しかしバートルビーは間違っている。なぜならコピーできない言葉など存在しないし、自分だけにしか使えない言葉などないからだ。言葉は自己の外と共有されてはじめて言葉として流通する。外部との関係性の中で初めて意味を獲得する。

そして、このコピーがオリジナルの地位を奪うというそのはたらきは、経済との関連からわれわれにもう

ひとつのメディアを思い起こさせる。貨幣である。前述のとおり言葉はすべてコピーだが、言葉と同様に貨幣もすべてコピーであり、どこにもそのオリジナルは存在しない。そして、私だけに通用する貨幣というものはなく、相手もそれを貨幣として認識し価値を承認することによってはじめて貨幣は貨幣になる。“Prefer” という言葉が決して誰のオリジナルでもなく、コピーされ人口に膾炙することによって初めて言葉としての地位を獲得するように、貨幣もコピーされて流通することによってはじめてその価値を確立する⁵⁾。

冒頭に引用した場面では、バートルビーの “prefer” が他の書写人たちに伝染し始めるが、伝染しているターキーは自分がその言葉を使っていることにさえ気がつかない。語り手に指摘されても気付かないばかりか、自分はそんな言葉は使わないと言ったはなからまたしても “prefer” を使って見せる (“Oh, *prefer*? oh yes— queer word. I never use it myself. But, sir, as I was saying, if he would but prefer?” [31])。ここでの “prefer” は「盲点」である。存在するのに見えていない。あるはずなのにであると認識されていないのだ。一方の語り手は自分がこの奇妙な言葉を使っていることを意識しているが、その言葉を “involuntarily” (31) に使っていることも自覚している。「自発的ではなく」ということは、逆に言うなら言おうとしていないのに言葉のほうに「自発的に」口から飛び出してくるということであり、これは全く恐ろしい状況である。人間に従属する道具であるはずの言葉のほうにあたかも意志を持つかのように勝手に飛び出す。人間は “involuntarily” でも言葉のほうは “voluntarily” に動き、流通し、増殖し始める⁶⁾。これらの様子もわれわれに貨幣を思い起こさせる。価値の表象でしかないのに盲点となって決してそのものじたいの価値を疑われることなく人々の間を流通する貨幣、そして時としてそれじたいが勝手にシステムを構築してわれわれを逆に支配してしまうメディアである貨幣、あるいはその働きに基づいたシステムである資本主義。

ここで貨幣とのアナロジーをきっかけに “Bartleby” 出版当時のアメリカの貨幣制度、なかでも紙幣制度を振り返ってみる。合衆国政府は独立戦争時に発行した大陸通貨以降、南北戦争時の Demand Note の発行まで国としての紙幣を発行していない。大陸通貨のインフレに懲りて人々の紙幣への信用が落ちる中、政府が新たな紙幣発行に動くことはなく、それでも地金が圧倒的に不足していたアメリカでは紙幣が必要であり、その発行は各地の州法銀行によって行われた。国家と

しての統一した紙幣を目指す動きがなかったわけではない。州法銀行と違って連邦から認可を得た第二合衆国銀行が1817に設立され、紙幣を発行して国家唯一の統一的紙幣の地位を目指した。しかし各地の州法銀行も紙幣発行をやめることはなく、そして第二合衆国銀行は紙幣嫌いのジャクソン大統領によって潰され、認可の切れた1836年以降、紙幣発行業務は完全に州法銀行のみによって行われるようになる。こうしたなか銀行と発行する紙幣の数・量は増加し、その結果1784年には一つしかなかった銀行が、1820年には266、1840年には712、そして1861年には1371まで増加した(Weber 31-33)。Standishによれば、紙幣の種類は1859年で9916、同時に5400種類の偽札も流通していたというが、別の資料では本出版前夜の1850年の時点ですでに1万種を超える紙幣が存在していたとするものもある(124, Mihm 3)。また、1862年の時点で流通していた紙幣全紙幣の80%もが偽札だったという説もある(David Johnson 37)。

そのような混沌とした状況の中で自分の手元にある紙幣が本物であるかどうか確かめるにはどうしたらよいのか。実はその手助けとなる印刷物があつた。それが counterfeit detector や bank note reporter と呼ばれる冊子である⁷⁾。これらの冊子は各地の紙幣のデザインや、出回っている偽札の特徴を列挙し、定期的な発行で情報をアップデートした。しかしここには問題が二つある。まず、これらの記述が、贋金づくりに改良の材料を与えてしまうということ。本物と偽物の間にある差異を指摘することによって、結果的にその差異を限りなく消去する手助けをしてしまうのだ。もうひとつはより重要な点であるが、紙幣の真正性を担保するこの冊子自体の真正性が確認できないということである。counterfeit detector じたいが偽造される可能性は常に存在したし、偽造ではなくとも伝聞や憶測に基づいた間違つた情報が掲載されることも多かつたという。つまりあるものの真正性を担保するための根拠が、それじたい真性ではない可能性があり、ではその根拠の真正性はいかに担保されるかという、これまたその外部に根拠を求める以外に方法はないのである。真正性の根拠を外部に持つものはつねにその真正性が崩される危険性を持ち、その堂々巡りは永遠に終わることがない。

こうした真正性のあやうさを考えるとき、作中でさりげなく触れられるだけの実在の人物の名前が、新たな意味を持ち始める。それは、Tombs に入れられたバートルビーに面会に行った語り手に対して、“grub-

man”が執拗に繰り返す“gentleman forger”の名前である。

“Deranged? deranged is it? Well now, upon my word, I thought that friend of yours was a gentleman forger; they are always pale and genteel-like, them forgers. I can't help pity 'em—can't help it, sir. Did you know Monroe Edwards?” he added touchingly, and paused. Then, laying his hand pityingly on my shoulder, sighed, “he died of consumption at Sing-Sing. So you weren't acquainted with Monroe?”

“No, I was never socially acquainted with any forgers. But I cannot stop longer. Look to my friend yonder. You will not lose by it. I will see you again.” (44)

Monroe Edwards (1808-1847) とは40年代に世間を賑わせた詐欺師であり、その公判記録が出版までされているという事実に当時の熱狂ぶりがうかがえる⁸⁾。“Grubman”はここで、バートルビーをエドワーズのような「紳士然とした偽造家」ではないかと疑い、語り手にエドワーズと知り合いではないかとしつこく尋ねる。エドワーズはたしかに“grubman”が言うように文書を偽造した“forger”なのだが、実はその偽造は単純な文書の書き換えではない。彼が書き換え、偽造したのは人物であり、その信用であつた⁹⁾。

エドワーズの手口が単純な文書偽造事件ではなく、むしろ偽造によって信用の担保を外部に増殖していることに注目したい。たとえば Brown Brother 社を騙した1841年の事件では、エドワーズが仕立て上げた架空の人物であるコールドウェル氏は、彼が騙す相手である商社の信用をもととは勝ち得ていない。エドワーズはこのコールドウェル氏の内部に信用を築くのではなく、偽造した別の会社からの手紙を送り付け、そこで氏について言及することによって、彼の外部に信用の担保をつくっていく。偽造することによってそれに基づく新たな信用を外部に上乘せし、最終的なコールドウェル氏の信用を強化していくのである。これは前述の紙幣と counterfeit detector の関係そのままであり、counterfeit detector を偽造してしまえば偽札が真札になるように、人間の信用も外部にその担保を持つのであれば、それを書き換えることで作り変えることが可能だということを表している。このように作中でわずかに言及されるだけのエドワーズの名前も、実は複製という主題と通底している。

そして実は、このように外部の担保によってしか自身の真正性を証明できないという特性は、貨幣そのものが不可避的に持っている特性でもある。そして貨幣とはその根拠を奇跡的にも循環論法によって成立させる存在なのだ。「貨幣に価値がある」のは、それが「価値がある貨幣である」、という根拠に基づくものであり、「価値がある貨幣である」ことの根拠は「貨幣に価値がある」ことのみを根拠にするという「永遠の循環論法」を免れ得ない。

マルクスは『資本論』において「価値形態論」で「商品」の集合体から貨幣の成り立ちを説明してみせた。「商品」は使用価値と交換価値を持ち、その交換価値は他の商品によって表される。ある商品は他のすべての商品によって自身の価値を表すことができ、それを反転すると、すべての商品は、その永遠に続く商品シリーズから唯一除外された単一の商品によって価値を表すことができる。その単一の商品が「一般的等価物」である。マルクスは「一般的等価物」を導入した「一般的価値形態」においてその地位を「20エレのリネン」にあえて仮定して見せた後で、次の「貨幣形態」でこの「20エレのリネン」を商品シリーズの仲間にも再編入し、かわりに「2オンスの金」を「一般的等価物」の位置へ移し、「貨幣形態」を披露して見せる。我々になじみのある金属貨幣の姿である。

しかしここから紙幣へ移るのは実は容易ではない。なぜならマルクス自身は商品の価値の根拠を労働に求める「労働価値説」を取り、金はそれゆえに貴重な貴金属として商品シリーズに名を連ねることができたが、紙幣に到ってはそこには他の商品と比肩するような労働は含まれてはいないからだ。岩井克人は『貨幣論』においてこのマルクスのジレンマを逆手にとり、「貨幣形態Z」を導入して貨幣が「永遠の循環論法」を生き抜く存在だということを証明してみせる。(60) 貨幣は「ほかのすべての商品に直接的な交換可能性をあたえることによって、ほかのすべての商品から直接的な交換可能性を与えられ、ほかのすべての商品から直接的な交換可能性をあたえられることによって、ほかのすべての商品に直接的な交換可能性をあたえている」のである。(61) Aである根拠はBであり、Bであることの根拠はAである。こうして無限の循環論法を実際に生き抜く存在となった貨幣は、その成立説明に必要としたハシゴである「労働価値論」をもはや必要とせず、空中に浮かんでクルクルと回り続ける。

このように循環論法を生きる存在ゆえ、貨幣は時として我々の盲目さを手玉にとったイタズラを仕掛ける。

前述のように多種多様な紙幣が存在していた19世紀半ばに流通していた紙幣のなかに、真正な紙幣として流通していたにも関わらず真札ではない *fantasy note* とか *spurious note* と呼ばれるものがある。これらの紙幣は、特定の紙幣の模倣ではなく、一般的な紙幣イメージを模倣して、存在しない銀行の名を掲げた。実際には発行元の銀行は存在しないし、だからその紙幣が発行された記録もない。にもかかわらずそれは紙幣の姿をし、そして疑われることなく流通し、本物の紙幣として働いて見せた。根拠を欠いたまったくの作りものでありながら、紙幣として流通しているという事実を根拠に紙幣として流通したのである。それは真札ではないという意味で「ホンモノ」ではないが、複製元のオリジナルを持たないという点では「ニセモノ」でもない。ホンモノとニセモノを両端とした線分上に程度として措定することができない。決まり文句がそうであったように。そして、そのありかはずましくこの世ならぬ *fantasy* の世界である。

下に挙げるのはこういった *fantasy note* の一例で、この時代をもう少し下って南北戦争時に南部で作られた通称 FRD (Female Riding Deer note) と呼ばれるものである。



これは真正な貨幣として受容され流通したが、南部連合の財務省にはその発行記録は、ない¹⁰⁾。

こうした *fantasy note* の存在は、まさしく貨幣が循環論法を生き抜く存在だということを示している。貨幣であることの根拠は貨幣じたいの外部に存在するが、それがひとたび貨幣として流通すれば、貨幣として流通しているという事実を根拠としてそのモノは貨幣となる。*Fantasy note* のように外部の根拠をもたないフィクションであっても、循環論法の円環に入ってしまうと貨幣として真正なはたらきをしてしまうのだ。

しかし循環論法はそうそう簡単には成立しない。信用を外部に築いて円環を閉じようとしたエドワーズが失敗したように。そしてバートルビーは貨幣のような実態を離れた複製の氾濫に抵抗する。資本主義の背後にある、この根拠を欠いた複製のシステムに抵抗する。

意味を欠いた偽物の“prefer”がコピーされて蔓延していくことに自らのオリジナルな“prefer”をもって抵抗するのである。ことばも貨幣も複製としてしか存在しえないというのに。

思えばバートルビーはこの事務所で働き始めた当初から複製することに抵抗していた。彼に与えられた仕事は法的文書を複写することだが、複写こそするものを読み合わせを拒否するバートルビーは、いわばその文書そのものはコピーしても、オリジナルの持つ performative な力を与えずに済ませ続けていたと言える。Hillis Miller がいうように、バートルビーは書類を「意味はもつがその有効性を奪われ、それ自体の亡霊となった言葉」へと変えてしまう。(159) 法的文書の複製とはただの文章を写すこととは異なり、その執行力を複製することでもある¹¹⁾。バートルビーは読み合わせを拒否するが、読み合わせを拒むということはコピーが本当にコピーであると確認するのを拒むということであり、コピーに有効性を与えないままにするということである。そのときコピーされた文書は死産され亡霊となる。そして流通から脱落させられる。Fantasy note という貨幣ならざるモノが、貨幣として流通しているということを根拠に貨幣となったことを裏返すなら、真正な貨幣であっても、流通から脱落してそのはたらきをなくした途端、もはや貨幣ではなくなる。バートルビーが複製の確認を拒むことによって行っているのは、これと同じことである。法的文書の複製を流通させることに抵抗し、システムから脱落させていく。紙幣のようなオリジナルを欠いたコピーを、生み出すと同時に殺し、死産していく、あるいはデッドレターにしていくのだ。

かくして亡霊的な文書をバートルビーは生産する、あるいは死産する。コピーでありながらコピーではない、有効性を欠いた文書を。では、彼自身はどうか？彼のおはこの prefer は事務所の従業員たちにコピーされて、いつときこの事務所を席卷する。バートルビーはそれに「怒ったように」抵抗を示すが、それ以降彼はまたしても「意志の無」の穴蔵へと退却し、事務所から動くことを拒み、Tombs に入れられ、そこであたかも死産された胎児のように身を丸めたまま動かなくなる。彼の複製する文書、デッド・レター、そして退蔵される貨幣と同じように「流通」の仕組みに抵抗し、彼自身も止まってしまう。Lorenz は、のちに逸話の中で伝えられるバートルビーがデッドレター・オフィスで扱っていた郵便のことを、行く先を失って動きをやめ流通の働きからこぼれ落ちた貨幣に重ねて

いるが、ここに至って手紙のみならず、バートルビー本人も、流通から脱落し貨幣的なはたらきを失い「死蔵」されていってしまうのだ¹²⁾。(76)

3. 構造の複製

複製に抵抗し流通という力に抵抗するバートルビーも、結局は複製の世界に回収されてしまう。なぜなら我々が読む“Bartleby”というテキストしたいがバートルビーという人間の複製だからだ。

作品の冒頭で語り手はバートルビーという人物を再現しようと言う。だからこの物語はそれ自体オリジナルのバートルビーのコピーである。ということは、バートルビーは複製に抵抗しながらも、テキストが存在するという時点ですでに複製の世界に取り込まれてしまっており、我々は複製の世界の中に、複製に抵抗するバートルビーの姿を見るしかない。あたかも複製への抵抗は失敗に終わってしまったかのようなのである。

しかし、“Bartleby”というテキストはたしかにバートルビーのコピーであるが、語り手が「完全な伝記を著すための素材は存在しないと信じる」と、それを再現することの不可能性を冒頭から認めているように、真正なコピーではない。語り手は、その不可能性の原因は、“original sources”以外には確証がないからだと言っている。(13) “Original sources”とはバートルビーその人である。結果、オリジナルに当たらない限りは完璧ではないと自ら宣言するコピーを我々は読まなければならない。「自分を読んでもバートルビーのことはわかりませんよ」と言っているテキストを読まなければならないのだ。バートルビーをわかるために。このとき“Bartleby”は、みずから真正ではないと宣言する複製となる。

我々はテキスト内においては、バートルビーに対する語り手の反応の中に、たしかにその複製能力の欠落を見る。たとえばバートルビーが書類の写しをやめたとき、語り手はバートルビーに、なぜやめるのだ？と問いかけ“Do you not see the reason for yourself?”と返されると、バートルビーが書写のしすぎで視力を損なったのだと解釈し、バートルビーがそれを一切肯定しないにもかかわらずそれを「前提」として行動する。(32) 我々はここで語り手のバートルビーへの理解に疑問を抱かざるを得ない。テキストの最後に意味ありげに付与されるデッドレターにまつわる後日談も同様である。語り手はバートルビーがデッドレター・オフィスを首になったといううわさ話を披露する。それはあ

たかも行き先を失った手紙を処理したがためにバートルビーがこのようになってしまったのだという因果関係を暗示しているが、しかしそれは決して合理的説明ではない。語り手は自分で認識している以上にバートルビーの複製に失敗している。オリジナルさえ「語りえぬ」ものをさらに複製し、失敗した文書は、それこそどこにもその根拠をもちえない、宙に浮いたままの存在となる¹³⁾。

バートルビーが確認を拒否した書類を、Weinstock は「ホンモノとニセモノ、認可と不認可の間の幽霊的 (spectral) なリンボに置き去りにされる」と評したが、同じく dead letter となったバートルビーその人もまた、「幽霊的なリンボ」に置かれることになる¹⁴⁾。(25) ホンモノとニセモノの間にありながらそのどちらでもない、いずれかに同定することもかなわず、両者の間の線分上に程度として配置されることもない、別の次元に属するものとして。こうしてバートルビーはテキストという複製の世界に閉じ込められながらもその複製性に抵抗してみせる。

そしてそのテキストのもうひとつ外側にあるメタ構造に目を向けてみるなら、バートルビーが、単純に複製の世界に取り込まれてしまったわけではないことがわかる。語り手はバートルビーに問いかけ、バートルビーは決まり文句で応える。このテキスト内の構造は、テキストの外側では、テキストと我々読者の関係に反復・複製される。我々読者はテキストを読み、それをなんとか解釈しようとし、テキストに問い (ask) かける。あるいは乞う (ask)。語り手がバートルビーに問いかけ、あるいは乞うたように。“Will you tell me *any thing* about yourself?” と。(30 イタリアック原文) いったい何を意味しようとしているのだ？ 教えてくれないか？ “Bartleby” というテキストは我々のその問いかけを無視しはしない。ただこう応えるだけである。“I would prefer not to.” このとき「意志の無」としてテキスト内に結晶化したバートルビーは、もはや抵抗「する」のではない。むしろ、バートルビーは、抵抗「そのもの」になる¹⁵⁾。

応答こそするものなのにも答えることのないその返答は、われわれ読者がこの謎めいた短編から受ける返答でもある。バートルビーに対する責任を果たせない語り手の姿は、“Bartleby” というテキストから満足な解釈を引き出せない我々読者の姿に重なる¹⁶⁾。こうしてバートルビーと語り手の関係は作品の外部に複製される。本論の冒頭に書いたように、この返答に負けない唯一の方法はそもそも問いかけないことだが、それ

はかなわない。我々はすでに“Bartleby”を読んでしまっている。テキストに問いかけてしまっているのだから。

ところが、ジャック・デリダがその小論「抵抗」で言っていることを思い出すならそこには新たな構造が見えてくる。語り手はバートルビーに問いかけるいわば分析家の立場にあるが、バートルビーの反復強迫的な抵抗にあって分析できない¹⁷⁾。その結果、テキストは語り手の言葉ですべて埋められることとなり、彼はそこで自分の内面を語らずにはいられない。分析家と患者の立場は逆転し、ここでは「誰が誰の秘密を(中略)分析しているのか、もはやわからない」のであり、もの言わずに抵抗する患者は分析家の立場になり、分析家は逆にあたかも患者のように語らされるのである。(50) この構造を先ほどのテキストの外側の読者との関係に敷衍するならば、我々はテキストを分析しようと試みるものの抵抗にあって分析を果たせず、逆に分析家となったテキストによって分析され、我知らず語らされる患者の立場となる。テキストを読み、問いかけてしまった我々は語り手と同じく語らされるのだ。

Dan McCall が書いたように“Bartleby”の周辺には「バートルビー産業」と言えるほどの無数の解釈が存在する。その多くが落とし込む安直な解釈をマッコールは批判するのだが、その批判の書きたいがこれまた“Bartleby”によって語らされているのにはかならないように、“Bartleby”というテキストはそれを分析しようとする者に、逆に語らせずにはおかない。抵抗そのものとなったバートルビーが、そして“Bartleby”というテキストが、われわれを分析し、語らせるのである。

こうしてバートルビーは複製に抵抗しながらも複製に取り込まれ、取り込まれながらも抵抗そのものとして結晶し、我々読者をいつまでも語らせ続ける。我々はただただ、決して満足できない複製を作らされ続けるだけなのである。

注

- 1) 省略しない場合もあるが、その際には必ず相手の提示した言葉を繰り返している。“…you will begin to be a little reasonable: —say so, Bartleby” に対して “At present I would prefer not to be a little reasonable” のように。(30)
- 2) 「無への意志」と「意志の無」は『ニーチェと哲学』でも使用されているように、ドゥルーズにおいてはニーチェの言うニヒリズムの諸段階を指しており、その意味ではバートルビーは「意志を持たない方がました」という受動的ニヒリズムの段階にある人間として捉え

られていると解釈できよう。

- 3) 資本主義との関連では、パートルビーに疎外された労働者を読み込む Barnett や、市場によってもたらされた社会体制の変化によって引き起こされる階級間の軋轢を読み込む Gilmore のようなマルクス主義批評があるが、本論のマルクスの援用はこれらの論考のように作品の背後に階級闘争を読み込むものとは異なり、むしろ資本主義にとってより本質的な議論である貨幣と作中ロジックとの間の相似を探ることを主眼としている。
- 4) Astor については Kaplan および Derbyshire 参照。アスターに言及したパートルビー論としては Forey, Saiki, 武藤などがある。なかでも Forey の、語り手の法律事務所がアスターまたはその支持を受けたトリニティ・チャーチから貸借されたものである可能性を指摘している点 (96) や、武藤の、アスターの名前に金貨銀貨といった硬貨が暗示されているという解釈 (45) は興味深い。
- 5) 同じように本作を複製の点から扱った Weiner は、メルヴィルが拒否したポートレート写真の流通を、「作者をある種の貨幣 (currency) に変える」行為だと指摘しており、ここにも複製の氾濫とその貨幣との類似が見て取れる (66)。
- 6) 同じようにあたかも言葉が意志を持ったかのように読める個所がもう一か所ある。Tombs に収容されたパートルビーを語り手が見舞う場面である。パートルビーは “I want nothing to say to you” と言う。“I want to say nothing to you” でも “I have nothing to say to you” でもないこの奇妙な言い回しには、言葉をあくまで自身から切り離された勝手に行動する存在として見る距離感がある。「私の使ういかなる言葉にもあなたに語りかけて欲しくはないのです」と。
- 7) *The Confidence-Man* (1857) でも終盤に counterfeit detector が登場し、メルヴィルが当時の混沌とした紙幣状況と信用の関心に関心を持っていたことは明白である。
- 8) *The Celebrated and Extraordinary Trial of Col. Monroe Edwards, for Forgery and Swindling*. 1842. エドワーズの伝記的記録については *The Life and Adventures* 参照。エドワーズへの言及に関連した解釈としては、語り手自身がエドワーズのような forger であり、この部分は「語り手自身が本当の自分と一社会的にも親密な意味でも一知り合いにさえなれずにいる」と語り手の “duplicity” を指摘する Dillingham がある。また、エドワーズへの言及の起源としては Robillard 参照。
- 9) 一例として彼がニューヨークの Brown Brothers 社から 2 万 5 千ドルの小切手をだまし取った 1841 年の事件を挙げる。テキサスの裕福な家庭に育ったエドワーズは、奴隷貿易に手を染め、のちにとある犯罪者集団からインクの作り方や数字の書き換えといった文書偽造のテクニックを学ぶ。彼はニューヨークの Brown Brothers 社 (以下 B 社) という commercial house を騙すにあたって、まずはニューオーリンズの Messrs. Maunsel, White & Co. (以下 M 社) に偽名で手紙を書

く。その手紙で、新たに綿花畑を所有することになったのだがその代理店をニューヨークに作りたい、という相談を好条件とともに提示し、商売上の相談があるのでニューヨーク支店の代表を教えてほしい、と依頼する。相手はこの話にのり、その返信からエドワーズはこの会社のサインを入手する。次に M 社を騙ってニューヨークの B 社に手紙を書き、M 社と取引のある架空の人物コールドウェル氏が NY で資金が入り用になっている、氏の綿花事業は時価総額にして 5 万ドルはある、まったく借金のない事業家であり、御社にとってもつきあいを持つのは悪い話ではないだろう、コールドウェル氏にも御社を紹介する手紙を出しておいた、と伝える。最後にコールドウェル氏名義で B 社あてに手紙を送る。M 社から御社を紹介する手紙を受け取った、と。こうしてエドワーズは B 社から小切手をせしめた。エドワーズの所業は露見し、裁判にかけられ、結局、彼の手による複数の偽造文書に共通したスペルミスが見られるという致命的な証拠によって有罪となったのち、Tombs に入れられ、Sing Sing の刑務所へと送られる。ここでも大統領への恩赦を求めべく 3 通の手紙を偽造して計略を練るが、実行前に発見され、絶望したエドワーズは精神錯乱に陥り死亡する。

- 10) 実際には紙幣の偽造家でもあった Sam Upham という男が作ったものである。(Tremmel 37-45) この紙幣自体は本作の出版より後の南北戦争の時代のものであるが、それ以前からこのようなオリジナルのない偽札が流通していたことは、“Bartleby” 出版前年、1852 年の Waterman L. Ormsby の記述にも見られる。“Another very common and audacious species of counterfeiting consists in the issue of bills, called *spurious notes*, which are not imitations of any genuine bills in particular, but made to bear a general resemblance to all bank notes, and purporting to be the issue of some solvent bank.... With the great majority of business men, it will escape detection if it [vignette] be a Vulcan, a Venus, a ship, a farmer, a steamboat, or a railroad, well engraved.” (Bowers 172)
- 11) パートルビーの働く事務所ではオリジナルの文書を作る権利は語り手である法律家にしか認められていない。ほかの書写人たちがオリジナルを作るのは越権行為であり、その越権行為をしようとしたニッパーズは語り手に非難されている。(16)
- 12) 同じように本作に「流通の拒否」を読む Reed は、それを流通が前提とする等価交換が実際は「等価」ではないことの指摘だとしている。(258)
- 13) パートルビーに流通の拒否を読み、流通しないことへの欲望が解釈の領域にも及ぶと主張する Reed は、このデッドレター・オフィスへの言及が『『説明不可能』なパートルビーのままにいたい、認識可能な意味回路に取り込まれたくない、というパートルビーの欲望』を示しているという。
- 14) パートルビー自身のデッドレター性は多くの評者が指摘するところである。たとえば Weinstock 23, Lorenz 75, Mitchell 332。

- 15) あとに触れるデリダはバートルビーの抵抗を反復強迫として読むが、反復強迫こそまさにそれじたいには目的や意味のない、死の欲動に基づく「抵抗」そのもの、デリダの言葉で言うなら「絶対的抵抗」(48) だということは指摘しておく。
- 16) テキスト内の関係がテキストと読者の間に再現されるという点は、Miller や西谷もすでに指摘している。
- 17) バートルビーの反復に死の欲動に基づく反復強迫を読むことはすでに Ohwada によってなされている。

Works Cited

- Barnett, Louise. "Bartleby as Alienated Worker." *Studies in Short Fiction* 11 (1974): 379-385.
- Bowers, Q. David. *Obsolete Paper Money: Issued by Banks in the United States 1782-1866*. Atlanta, Whitman. 2006.
- Deleuze, Gilles. *Essays: Critical and Clinical*. Trans. Daniel W. Smith and Michael A Greco. Minneapolis, U of Minnesota P. 1997.
- Derbyshire, Wyn. *Six Tycoons: the Lives of John Jacob Astor, Cornelius Vanderbilt, Andrew Carnegie, John D. Rockefeller, Henry Ford and Joseph P. Kennedy*. London, Spiramus. 2008.
- Dillingham, William B. *Melville's Short Fiction, 1853-1856*. Athens, University of Georgia P. 1977.
- Forey, Barbara. "From Wall Street to Astor Place: Historicizing Melville's 'Bartleby.'" *American Literature* 72.1 (2000): 87-116.
- Gilmore, Michael T. *American Romanticism and Marketplace*. Chicago, U of Chicago P. 1985.
- Johnson, Claudia Durst. *Understanding Melville's Short Fiction*. Westport, Greenwood. 2005
- Johnson, David R. *Illegal Tender*. Washington: Smithsonian, 1995.
- Kaplan, Justin. *When the Astors Owned New York*. New York, Plume. 2006.
- The Life and Adventures of the Accomplished Forger and Swindler, Colonel Monroe Edwards*. New York: H. Long. 1848. *HeinOnline*. Web. 20 Sep. 2010.
- Lorenz, Johnny. "Escape from the Dead Letter Office." *Interventions* 7 (1) (2005): 72-83.
- McCall, Dan. *The Silence of Bartleby*. Ithaca, Cornell UP. 1989.
- Melville, Herman. "Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall-Street." *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. Ed. Harrison Hayford, Alma A. MacDougall, and G. Thomas Tanselle. Evanston: Northwestern UP and the Newberry Library, 1987. 13-45.
- Mihm, Stephen. *A Nation of Counterfeiters*. Cambridge: Harvard UP, 2007.
- Miller, Hillis. *Versions of Pygmalion*. Cambridge: Harvard UP, 1990.
- Mitchell, Thomas R. "Dead Letters and Dead Men: Narrative Purpose in 'Bartleby, the Scrivener.'" *Studies in Short Fiction* 27 (1990): 329-338.
- Ohwada, Toshiyuki. "The Intensity of Repetition: *Bartleby, the Scrivener* and the Subversion of Law." *Colloquia* 22 (2001): 71-80.
- Reed, Naomi C. "The Specter of Wall Street: 'Bartleby, the Scrivener' and the Language of Commodities." *American Literature* 76.2 (2004): 247-273.
- Robillard, Douglas. "Monroe Edwards and Melville's Bartleby." *English Language Notes* 15.4 (1978): 291-294.
- Saiki, Ikuno. "'Bartleby, the Scrivener': The Politics of Biography and the Future of Capitalism." *Melville and the Wall of the Modern Age*. Ed. Arimichi Makino. Tokyo: Nan'un-Do, 2010. 77-96.
- Standish, David. *The Art of Money*. San Francisco: Chronicle, 2000.
- Tremmel, George B. *Counterfeit Currency of the Confederate States of America*. Jefferson: McFarland, 2003.
- Weber, Warren E. "Early State Banks in the United States: How Many were There and Where did They Exist?" *Federal Reserve Bank of Minneapolis Quarterly Review* 30.2 (2006): 28-40.
- Weiner, Susan. "'Bartleby': Representation, Reproduction and the Law." *Journal of American Culture* 17.2 (1994): 65-73.
- Weinstock, Jeffrey Andrew. "Doing Justice to Bartleby." *ATQ* 17 (2003): 23-42.
- マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』1920. 大塚久雄訳 岩波文庫 1989.
- ジャック・デリダ『精神分析の抵抗』1996. 鶴飼哲, 守中高明, 石田英敬訳 青土社 2007.
- カール・マルクス『資本論第一巻(上・下)』1867. 今村仁司他訳 筑摩書房 2005.
- 岩井克人『貨幣論』筑摩書房 1998.
- 西谷拓哉『「バートルビー」と同語反復』『論集：神戸大学教養部紀要』46 (1990): 53-74.
- 武藤脩二「メルヴィルの『バートルビー』—歴史と使徒—」『中央大学文学部紀要』131 (1989): 37-57.